

令和 8 ・ 9 年度 （2026 ・ 2027）

教育研究課題

創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を
届けよう！こどもと共に生きるよろこびを

目次

【主題】

創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を
届けよう！こどもと共に生きるよろこびを

【主題設定によせて】

【課題と解説】

- 重点課題 1 一人ひとりを尊重した質の高い乳幼児期の教育・保育について考える
～0歳からの育ちを支える園及び家庭教育の在り方～
- 重点課題 2 子どもたちと保育者のウェルビーイングを目指す保育者集団形成のために
～保育者の役割をあらためて考える～
- 重点課題 3 質と評価の時代における園長・リーダーの学びの重要性
～学校評価、ECEQ®を通して園全体で学びながら問い続ける園文化の醸成～
- 重点課題 4 相互に理解し合い、幼児期の学びを小学校につなげる
～それぞれの特性を理解し架け橋期を考える～
- 重点課題 5 AI 社会の中で、これからの時代に必要な経験とは
～遊びが育む創造性と未来を切り拓く力～

- | | | |
|-------|----------------|-------------|
| ・課題 1 | 愛されて育つ子ども | 【研修俯瞰図 A分野】 |
| ・課題 2 | 子どもや同僚と共に育つ保育者 | 【研修俯瞰図 B分野】 |
| ・課題 3 | 幼児教育・保育理論 | 【研修俯瞰図 C分野】 |
| ・課題 4 | 子ども理解 | 【研修俯瞰図 D分野】 |
| ・課題 5 | 保育の計画と実践・評価・改善 | 【研修俯瞰図 E分野】 |
| ・課題 6 | 子どもが育つ家庭や地域 | 【研修俯瞰図 F分野】 |

【主題】

創りだそう！こどもの未来を拓く、良質な乳幼児期の教育を

届けよう！こどもと共に生きるよろこびを

【主題設定によせて】

私たち保育者は、子どもたちの生涯にわたる人格形成の基礎を培うという重要な役割を担い、「人を育てる」という尊い営みの中で生きています。その実践にあたっては社会全体が「子どもは愛おしく、社会にとってかけがえのない存在である」という思いを抱き、子どもを一人の「主体者」として尊重し、その権利を保障することにあります。一層深刻さを増す少子化は社会情勢に影を落とし、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化し、その影響は社会全体に様々な形で広がり深刻な社会課題となっていることは否めません。変化が激しい時代を生きる子どもたちの幸せのために、改めて自分たちの役割を問い直し、未来を拓く子どもたちをどのように導き支えていくことができるのか。保育者自身が誇りを持ち、教育の本質を見失うことなく理想を掲げ、子どもの未来を拓く良質な教育と環境を創りだすことができるよう、各家庭に寄り添いながら、幼い子どもたちと共に生きるよろこびを社会全体に届けていかねばならないと思っています。その美しく愛らしい姿を尊重し、日々子どもたちとの豊かな生活が子どもたちの未来を拓く大きな学びにつながると信じてやみません。

日本全国、各地区、各地域の実情に合わせて私たちが学び続けることが、子どもたちの幸せにつながると信じ、質の高い豊かな乳幼児期の教育を紡いでいきたいと願っています。このような思いを込め「令和8・9年度教育研究課題」を皆様にお届けいたします。

令和7年10月

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

教育研究委員長 岡本 潤子

※主題における「こども」の表記は、こども基本法の理念を踏まえ、また主題として全国の乳幼児期の教育に関わる皆様に親しみやすいものであることを願い、柔らかく「こども」と平仮名表記にいたしました。なお、重点課題以下、課題と解説につきましては従来通り「子ども」と表記いたします。

【課題と解説】

重点課題1 一人ひとりを尊重した質の高い乳幼児期の教育・保育について考える
～0歳からの育ちを支える園及び家庭教育の在り方～

重点課題2 子どもたちと保育者のウェルビーイングを目指す保育者集団形成のために
～保育者の役割をあらためて考える～

重点課題3 質と評価の時代における園長・リーダーの学びの重要性
～学校評価、ECEQ®を通して園全体で学びながら問い続ける園文化の醸成～

重点課題4 相互に理解し合い、幼児期の学びを小学校につなげる
～それぞれの特性を理解し架け橋期を考える～

重点課題5 AI社会の中で、これからの時代に必要な経験とは
～遊びが育む創造性と未来を切り拓く力～

社会の急速な変化や子育てを取り巻く環境の多様化の中で、乳幼児教育に携わる私たちは、これからの時代にふさわしい教育・保育の姿を問い続ける責務を負っています。子どもたちの健やかな成長を支えるためには一人一人の存在を尊重し、家庭や地域との連携、協働を深めながら、教育の質を高めていくことが求められています。

また、保育者自身の学びとウェルビーイングを大切にする園文化を育み、園長やリーダーが質と評価の時代における学びを先導することも欠かせません。更に、子どもたちの学びを小学校へと円滑につなげる視点、そしてAIが進展する社会において乳幼児期に保障すべき経験を見極める視点が、これまで以上に重要となっています。

これらはすべて、私たち乳幼児教育に携わる者に「未来を生きる子どもたちが、今、何を育み、何を経験するのか」を問いかけています。上記の5つの重点課題は、その問いに応え、実践と研究を深めるための道しるべとなるものです。皆様におかれましては、各地区や都道府県での教育研究大会をはじめとした研究や各園も含めた研修の取組の手がかりとして適宜取り上げ、深めていただきますようお願いいたします。

愛されて育つ子ども

（研究・研修のテーマ例）

- 乳幼児期からの人権教育を、対話を通して学び合う
- いのちの大切さを実践事例から学ぶ保育
- 愛着形成と人間関係の深まり
- 個性が響き合うインクルーシブ教育の在り方とクラス集団の育ち
- 多様性の中で互いに育ち合う教育の在り方とクラス集団の育ち
- 子どもの健康な心と身体を育む食育を考える
- 子どもの安全を守る保育と環境
- 園の安全管理体制、危機管理体制を考える（研修・マニュアルの見直し等）
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

特定の信頼できる大人との間で築かれた愛着により、自分は愛されている、かけがえのない存在であるという自尊感情と、身近な大人への基本的な信頼感が子どもの人格形成の基礎となることを鑑み、家庭と連携し、子どもの権利を保障する保育を考えることが大切である。

園環境の中で子どもは様々な「ひと・もの・こと」と出会い、関わりながら学んでいく。愛情深く丁寧な育まれた環境の中では、一人一人の尊厳が守られ、学び合う関係性の中で、自己肯定感が醸成され、様々なことに挑戦しようとする姿が見られるようになる。更に、わくわくするような体験や、美しさ・不思議さを感じるような内面を揺り動かされる体験を通して感性が磨かれ、心はより豊かに育まれてゆく。また、子ども同士の深まった関わりの中で起こり得る「葛藤」「協同」「自己実現」を繰り返し経験することで、互いに認め合う関係性も築かれていき、自己も他者も尊重するという思いやりの核も培われてゆく。

私たち保育者は、多様な個性や特性、背景を有するすべての子どもの権利を保障する保育を通して一人一人の能力やニーズを理解し、それらに合った適切な関わりを丁寧に行いながら、可能性を活かすことが大切である。また、どの子も「この世は、自分が生きるに足る世界なのだ」という感覚を持つことができるよう、その子らしさを受け止め、子どもたちの人権、健康、安全・安心を守りながら、愛情に満ちあふれた保育を実践していくことが重要である。

子どもや同僚と共に育つ保育者

(研究・研修のテーマ例)

- 主体的に学び続ける保育者の在り方
- 人間性豊かな保育者の育成
- 自分の得意分野を保育に活かす
- 仕事の効率化と組織の活性化を考える
- 自園の教育理念や教育課程の理解
- 教育課程の編成と評価・改善
- ECEQ®を活用し自園の良さや課題を語り合う
- 各都道府県における ECEQ®コーディネーターの育成
- 園を支えるミドルリーダーとしての役割を学ぶ
- 自園の保育を語る
- 同僚性を育む「語り合い」「学び合い」
- 保育者の役割を再考し、保育者のウェルビーイングを考える
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

保育者は、子どもにとっての良き理解者であり、憧れのモデルであり共同作業者でもある。愛情深く子どもに寄り添うことのできる豊かな人間性といった資質を備えた保育者のもとで、子どもは安心感や安定感をもちながら園生活を送ることができるようになる。様々な遊びや生活からの学びは、義務教育及びその後の教育の基礎、更には生涯にわたる人格形成の基礎を培うものとなる。保育者が自らの経験を基に多方面での学びを積み上げていくことで、子どもの遊びや生活を深め充実させることにつなげることができる。

そのために保育を省察するためのツールとして様々な評価方法を知り、自園の自己評価に活かすことが必要である。

また、保育や子どもの姿について様々な観点で同僚と語り合い、学び合う園内研修や、保育者一人一人が自らの持ち味を活かすためのキャリアに応じた研修の受講は、園内の組織の活性化にもつながる。

特に当機構が開発した ECEQ®は STEP1 から STEP5 のプロセスにおいて園の PDCA サイクルが機能する仕組みを持つことから、ECEQ®を活用することにより、自園の保育の良さや課題を共有し取り組むべき課題を明らかにしたり、その過程において園内のコミュニケーションを活性化したり、同僚性を高める手法を学ぶことができる。

変化の激しい時代において未来を拓く子どもたちを導き支え、子どもたちのウェルビーイングを実現するためには、保育者のウェルビーイングの実現も不可欠である。

子どもたちの人格形成の基礎に大きく関わる私たち保育者は、子どもたちの姿から学び、成長し続ける存在でありたい。

幼児教育・保育理論

(研究・研修のテーマ例)

- 発達連続性を踏まえた乳幼児教育理論
- 乳幼児期から児童期の育ち・発達の理解
- 発達理論の理解（愛着の形成等）
- 社会性の育ちと規範意識の育ち
- 日本の教育・保育制度と世界の教育・保育制度
- 現代の教育・保育制度の課題
- 幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針の変遷
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

私たちは、大人も子どもも社会の中で生きている以上、好むと好まざるに関わらず、その時々、社会の影響を常に受け続けている。しかもその影響力は想像以上に大きく、そのほとんどが意識されない中で、人々の価値観となり、暮らしとなり、生活習慣へとつながる。そしてそれは、時にはヒトとして進化するものと退化するものと、混在している。

私たちの日々の保育という営みも、長期的、俯瞰的に見つめてみると、その時代背景である社会、時代が求めていた大人像や子ども像、それらに向けての教育目標や内容、方法等が異なる。だからこそ、これまでの歴史にある乳幼児教育や保育や思想の進化と退化を含めた変遷をたどりながら、その時代の社会が求めていたものが何であるかを知ること、これからの未来に向かって私たちが大切にすべきことを理論的に示してくれるのである。

AI に代表される Society5.0 や、あいまいで不確実で正解のない時代（VUCA）を生き抜いていく子どもたちが、充実した毎日を過ごすためにも、乳幼児期をどのような環境で過ごすか、そしてその根底にある保育の思想や理念をどう位置づけて保育を進めていくかという問題意識を持つことは、極めて重要である。

子ども理解

(研究・研修のテーマ例)

- 子どもは生まれながらにして一人の主体者、有能者であることからの子ども理解
- 育みたい資質・能力の3つの柱の視点から子どもの育ちを捉えた保育実践
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた保育実践
- 0歳からの子どもの発達・育ちの理解と保育実践
- 関係性（子ども同士、身近な大人）の中での育ちの理解と保育実践
- 子どもの内面理解、発達過程の記録、可視化するための手法と活用
- PDCAサイクルを活かした子ども理解と実践の質的向上
- 多様性を尊重した保育実践
- インクルーシブな保育を目指し、共に育ち合うという視点での保育実践
- 特別な支援を必要とする子どもへの個別の指導計画作成や家庭、関係機関との連携
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

保育は「子ども理解」から始まる。子どもの姿をていねいに捉え深く理解することは、保育者に求められる資質、能力の基礎となり、とても重要なことである。そのため、母体の中でこの世に生を受けてから乳幼児期や学童期を経て大人へと成長する、生涯にわたる発達の道筋を、最新のエビデンスに基づき理論から学び直すことが大切である。私たちは子どもは生まれたその時から一人の主体者であり、有能者であることを理解していきたい。同時にその理論を実践に落とし込むために、幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領を踏まえた子ども理解でなくてはならない。

保育者には、子ども理解につながる様々な記録の工夫や、子どもの成長・発達を可視化し、それをもとに保育者同士で語り合い、多様な考え方を大切にしながら多面的に子どもの姿を捉えていく姿勢が求められる。また、そのことを保護者と共有し子どもの成長を共に喜び、考え合えるような機会を持つことも大切である。

ダイバーシティ（多様性）やインクルーシブ（包括・受容）が重視される社会においては、一人一人の違いが受け止められ、等しく尊重され、教育・保育の公平性を担保していくことがますます重要であり、互いの多様性を認め合う生活や文化の中において、すべての子どものウェルビーイングにつながるよう援助したい。

個別最適な学びは乳幼児教育の本質であり、私たちが大切にしてきた教育である。

保育の計画と実践・評価・改善

(研究・研修のテーマ例)

- 幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の理解
- 子どもの主体的な遊びや活動の展開
- 一人一人の発達に即した活動の展開と個別のニーズに応じた指導計画の作成
- 園行事の取組と行事の過程を通しての子どもの育ち
- 子どもと共に作り出す活動と環境
- 次の保育につながる記録の在り方
- 指導計画と実践がつながっていくための評価の工夫
- 園の課題の発見と保育者同士の共有
- 保育の質向上につながる評価の在り方について考える
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

これからの急速に変化する社会、特に AI やデジタル技術の進展、多様化する子どもや家庭の背景に対応するためには、保育実践の質を常に問い直し、向上させていくことが重要である。保育実践は、乳幼児期における子どもの発達理解を基盤とし、幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領を正しく理解したうえで、各園の教育理念を踏まえて教育課程・指導計画を組織的・計画的に編成、実行していくものである。

要領に示されている3つの柱「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」は、これからの時代を生きる子どもたちにとって不可欠な「生きる力」の土台であり、各園における保育活動全体を通じて育まれるものである。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児期の発達にふさわしい遊びや生活の積み重ねを通して形成される子ども一人一人の学びの方向性であり、保育者が実践を評価、改善していくうえでの大切な指標となる。

保育実践は、子ども理解に基づいた指導計画の立案から始まり、環境構成、そこに関わる子どもの姿、保育者の援助、そして評価と改善へとつながるプロセス（カリキュラム・マネジメント）の中で展開される。

これからの時代に求められるのは、子どもたちの多様な育ちや姿に柔軟に対応できる視点であり、観察や記録を通じて子どもの姿を深く捉え、それを基に保育を再構成する力である。指導計画と実践を評価、改善することは、園生活の充実のみならず、保育者自身の専門性向上、そして学校評価にもつながる。こうした実践と省察が、今後の研究・研修の可能性へと広がっていく。

子どもが育つ家庭や地域

(研究・研修のテーマ例)

- 幼保小の連携及び接続の理解と、架け橋期のカリキュラムの在り方
- 子育ての現状を理解し、幼稚園・認定こども園の役割と在り方を考える
- 預かり保育・親子登園・子育て相談等、子育て支援の在り方を考える
- 特別なニーズを持つ家庭への支援の在り方と、幼児教育センター等、関係専門機関との連携
- 地域の資源を活用した保育の在り方
- 各地区独自の課題

■ 研究・研修の視点

現代社会において、地域の近所付き合い等大人同士の関わりや子ども同士の交流の場も少なくなり、核家族化、少子化、ひとり親家庭の増加が進む中、悩みを抱える保護者が孤立してしまうことが深刻な社会問題になっている。そういった子育て家庭の現状を知り、ニーズに合った支援をしていくことが大切である。

私たちはこれらのことを理解し、幼稚園・認定こども園としての役割を地域の方に知っていただくと共に、地域に開かれた園になる必要がある。また、子どもの育ちにおいては、生活習慣の未確立、コミュニケーション力の低下、愛着障害等の多くの課題が指摘されている。各園における子育て支援においても子どもたちが安全・安心に遊ぶことができ、相談、情報提供、親子登園、保護者同士の交流等が出来る場を提供し、互いに子どもの成長と子育ての喜びを感じられるようになる等、地域における乳幼児期の教育のセンターとしての役割が期待されている。

また、保護者に対しての育児・教育相談に対する知識も身につけていかなければならない。近年子どもの貧困、虐待といった課題も浮かび上がり、関係機関や専門機関と連携しながら、地域のネットワークを活用した支援体制を整えていくことも必要となっている。

預かり保育では、子どもの心身の負担を考慮するうえで生活リズムや生活の仕方に十分配慮しながら、子どもの生活全体が豊かなものとなるよう家庭や地域における乳幼児期の教育支援に努めなければならない。

幼稚園教育と小学校の教育への滑らかな連携・接続においては、幼稚園・認定こども園等での生活が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることを踏まえた架け橋期のカリキュラムを編成していく必要がある。また、小学校教員との意見交換や合同の研究会等を受け、それぞれの特性を理解し合い、円滑な接続を図るように努めていかなければならない。